

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1187 号	氏名	税所 宏幸
審査担当者	主査	上野 高史 (印)	
	副主査	牛島 一男 (印)	
	副主査	福井 義弘 (印)	
<p>主論文題目：</p> <p>Long Term Results and Predictors of Left Ventricular Function Recovery after Aortic Valve Replacement for Chronic Aortic Regurgitation</p> <p>(慢性大動脈弁閉鎖不全症に対する大動脈弁置換術後の遠隔期成績と左室機能回復の予測因子)</p>			

審査結果の要旨 (意見)

本論文は、大動脈弁閉鎖不全症に対する大動脈弁置換術の遠隔成績と、その至適時期について書かれた臨床論文である。従来利用されてきたエコーの計測値だけでなく、体格 (BSA) 補正した値を用いることで、より適格な手術時期について述べられている。用いられている方法は妥当であり、その結果も下記のように明確に提示されている。また、discussion も適切であり、学術論文らしく素晴らしい。

論文要旨

慢性大動脈弁閉鎖不全症 (AR) に対する大動脈弁置換術 (AVR) の手術適応とその至適時期について、術後の左室機能の回復の観点からの検討が重要であるとされるが、本邦における検討はない。1989 年から 2010 年までの 22 年間に当科にて施行された AR に対する AVR177 症例について、その遠隔成績を調査し、遠隔期における左室機能の回復の経過、また回復に影響を与える術前因子について検討した (追跡率 96.0%)。全症例の在院死亡率は 1.1%、10 年心関連死亡回避率 95.0%、20 年生存率 79.1% であり、その早期・遠隔成績とも良好であった。遠隔期に 16% の症例において左室機能の正常域までの回復が得られず、多変量解析にてその危険因子として術前収縮期左室径係数 (iESD)、心係数 (CI) が有意な因子として抽出された。そのカットオフ値はそれぞれ  $26.7 \text{ mm/m}^2$ 、 $2.71 \text{ l/min/m}^2$  であった。以上より AR に対する AVR 後の遠隔期成績は良好であり、左室機能の回復という観点より、iESD が  $26.7 \text{ mm/m}^2$  になる前に AVR の適応とすることが望ましいと考えられた。